
リリカルってなに？

俺だよ、俺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルってなに？

【Nコード】

N51120

【作者名】

俺だよ、俺

【あらすじ】

たった一人の少女を恨んだ少年の物語。なんとなく思いついたから書いた、理由は無い。ついでに言えば後悔しているような？ 矛盾点などがあるとは思いますが無視の方向で

目が覚めるとそこにあつたのは見知らぬ白い天井、体に力が入らない、起き上がることも出来なければ手を伸ばす事さえも出来ない。何故だろうと考えてみる、しかしこうなってしまった原因については全く思い浮かばない

昨日自分の布団で眠った記憶はあるのだがそれだけだ

もしかしたら寝ている間に何らかの事件に巻き込まれてしまったのかもしれない、この天井が病院のものだと考えるのであればそれも納得できる

その考えが正しいのか確かめたいのだが今の僕にはそれを実行する事ができない

声が出せないし、手も動かす事だできないのだ、これでは直接呼ぶこともナーコールを押す事もできやしない

しょうがないので自分の体をどうにか動かすことが出来ないものかとちよつとずつ動かしてみる、ちよつと動かすだけで節々が悲鳴をあげて 無理という事が分かった。これほどの傷ならば巻き込まれた事件はかなり大きなものなのだろう

そうやって少しずつ体を動かして調子を確認しているとガラガラと扉が開く音がして靴の音が聞こえてきた、しかしその靴音は僕に少しだけ近付いたところで立ち止まり今度はバサバサと書類か何か軽いものが落ちる音が聞こえてきた

そして次に「先生ー！」と叫びながら走り去っていく音が聞こえた、病院なんだから少しは静かにする努力をしなさい看護師で女性

なんだから

そんな心の中で呟いたツッコミなど聞こえるはずも無くバタバタという足音が段々と遠ざかっていく

さて、どうやら僕はここで起きれるような状態ではなかったようだ、これはもう笑うしかないって感じの怪我のようだ……家族は大丈夫だろうか？

新たな心配事が増えたが今は自分の体のことが優先である、先生が来るまでノンビリと待つことにしよう

どうやら僕はかなりの重症でここに運び込まれてきたらしい、なんでもここまで意識がハッキリしているとは奇跡に近いのだとか。それにしても命に別状は無いそうなのでこれで一応の安心は出来たと言っものだ

さて次に気になることが新たに出来た、それは……

僕は決して西村沙希などという名前ではない！

それに僕は男である、しかしここにいる医者達の話の聞いていると何故かこの医者は僕の事を女の子扱いしている感じがする。しかし今の僕ではそれを確かめる術は一切無い、何故なら体を動かすことが出来ないし体を洗う事さえ出来ないのだから

どうやらちょっとおかしい気がしてきた、もしかしたらこれはただの夢なのかもしれない。いやしかし痛みは本物だった

僕は混乱したのだが、このままでは僕が精神的に疲れるだけだということに考えが達したのもう考える事を放棄して眠りにつく事にした

医者からも良く寝て早く直す事に専念しなさいと言われた事だしね

さてノンビリ入院生活を過ごしていてもだれも見舞いに来ないとはどういうことだ、おい

毎回扉を開いて中に入ってくるのは看護師の方のみ、最近ではやっと言葉を発せる状態まで体が回復したようだ

あと汗をかいて気持ち悪かったのも体を拭くのは良いという許可を貰えたので最近ではだいぶスッキリしている

ただし残念な事に僕は自分の体が女である事を自覚してしまった、どうやら何故か事故の影響で体が女のものになってしまったようだ……この状況どっかの漫画で読んだことがあるような……でも今回は僕の性別は女である、何故かそれが当たり前のように受け入れられていて普通に接しられている。何故？

そして数ヶ月入院していると段々体力も回復してきてどうにか起き上がれるようになった、ここまで回復したのならもうすぐ退院できると医師からお墨付きをいただいた位だ

しかしいまだに誰も僕の見舞いに来てくれない、一体どういふことだろうか？それを医者に聞いてみると言葉を濁してどうにかその話題を避けるようにしているように思える

どうにかして聞き出そうとするのだが、どうしても聞くことが出来ないのだ

ここまで来ると怪しくてしょうがないのだが

だがそれでも聞くことは結局出来なかった

退院の日が無事に決まった、それは暑い夏がそろそろ終る9月の某日。そしてそれが告げられた日にもう一つ先生の口から語られた言葉、それは両親の死という受け入れがたいものだった

そこに感慨と言うものは無いはずだった、何故なら死んだのはこの体の持ち主である少女の親なのだから

しかし気が付いた時には僕は涙を流していた、心ではなんとも思っていないまでもこの体が直接反応してしまう

もしかしたらこの体の持ち主である少女はいまだにこの体のどこかに宿っているのかも知れない

僕は泣いた、誰もがそれを見ていることしかなかったが僕はその視線の中心で体が求める限りに声を大にして泣いた

そしてもう一つ知ったことがある、この事件での死者はもう一人。その少年の名前は”佐藤 進”、僕の前の体の名前だった

ありえない事件での犠牲者の数はかなり多い、死者の人数は3人。
この子の両親と僕だけだった

突如として都市の中央に生えた巨大な樹木の真下にいた数名の
の達がこうして死んでしまったのだ

生えた木はその後現れたときのように突如として消滅してしまっ
たそうだ、その為にその原因がはつきりとは分からなかったのだが、
これは後に始まる異常現象の始まりとして語られる事になった

これからどうするべきなのか、僕はこれからの生活を思い絶望に
胸を沈めるのだった

とりあえずは施設に預けられる事に決まったらしい、どうやら僕
を預かる親戚が見付からなかったようだ。それにこの体はまだ9歳
という体だ、一人で生活するなど到底無理と判断された

このままでは施設入れられてしまうのだがその前に前の家族に一
目合いたいと考えたのだが、どうやら前の家族は僕の遺体とともに
どこかへ引っ越してしまったらしい

なぜこうまで上手くいかないのだろうか？

どうしてこうなってしまったのだろうか？

誰のせいだと考えても全ては天災と考えられてしまう

誰にも当たる事は出来なかった、誰にも頼ることが出来なかった

もう、全てがどうでもよくなった

無いもする気が起きない

リハビリをされると言われても目標がもてない

これで体が完治してもどうせ何もすることが出来ないのだから

前の体では12歳だったのが災いしたのか、これからの事が簡単にだが想像できてしまったから

元の生活など送れるはずも無い、しかも体が違うのだ、これほどまでにつらいことがあるだろうか

そんな風に考えていると、彼の元に通の手紙が届いた。なんでも今まで連絡の付かなかった親戚からだと言っ

それだけなら彼の目に光を取り戻すには少しばかり足りえないだろう、しかし彼は手紙を開いたときその瞳に力強い火がともったのを見たものは誰もいなかった。もしこの様子を見たものが近くにいたのであればその人はこの手紙を奪いそしてその内容を驚愕の目で見る事になるだろう

内容はたった二行の文章

「これは天災ではなく人災だ
私はこの犯人を知っている」

僕は心が震えた、私も心が震えた

どうすることも出来ないはずだったのがこの一文で心のどこかに火が付いた気がしたのだ

普通では信じる事のできない文章でも、今の僕を私を動かすには十分すぎるほどの威力を持っていたのだから

僕は早速そこに書いてあった電話番号に連絡を入れて養子縁組を承諾する事となった

ここから僕の生活は一変する事になる、ただ一人の少女に復讐する^{アヴェンジャー}ためだけに生きる事を決めた復讐者として

9月某日、ついに僕はこの病院から退院することが出来た
手紙を受け取ってからの僕はリハビリに力を入れた、どんなことがあっても9月までに万全の状態にもっていきたくったからだ。そのせいで少し医者からも心配されたがそんなことを気にする事など今の僕には不可能だった、目標が定まった今、決して止まる事など出来ないのだから

僕はありえない回復と言われたほどの体を手に入れて病院の出口に向かった

結局今回僕を養子としてくれる人物は一度たりとも僕の前に現れることは無かった

しかしそんな事はどうでも良いのだ、僕には僕の父には父の目的というものがあるのだから。それならばその過程などどうでも良い
病院の入り口に着くと自動ドアが開かれた、そしてその時に吹き込んできたまだどこか暑い風に顔を顰める

「やあこんにちはお嬢さん、私がギルグレアムだ」

髭面の威つい養父がいた

「西村沙希です、よろしくお願いします。グレアムおじさん」

止めてあった車に乗せられ、僕はどこかへと連れて行かれた
車の窓から流れていく風景を眺めている僕にグレアムは言葉を紡ぐ

「さて、すこしこの世界の裏側について話そうか」

「いいません、仇についてだけ教えてくださいだされれば結構です」

「若いうちはそう行き急ぐモノじゃない、ゆっくり落ちつかなければ色々なものを逃してしまうものさ」

僕はまた車の外の風景に視線をもどした

「この世界には様々な次元と呼ばれる存在がある、その次元の一つがここだ。しかし様々な次元には様々な文化が根付いているものだ、その中の一つが魔法と呼ばれるものだ。そして君が巻き込まれてしまった事件の原因がその魔法なのだよ。ここまでで質問は？」

「その話が本当だとして、その魔法と言う文化がこの世界に入ってきたのはなぜ？それとも元々存在していたの？」

「いや、この世界からは魔法と言う文化は存在していないよ、他の次元から入ってきてしまったんだ。何故かと言われればたまたま偶然としか良いようがないね」

「じゃあ、これは人によつて起こされたものじゃないの？ただ偶然が重なっただけ？」

「そうでもない。今回の事件に関わっていたのは数名いる。一人はこの世界以外の住人で事件の発端となる魔法をこの世界に持ち込んだ張本人、ユーノ・スクライア、そして事件を見す見す見逃した高町なのは、この二人だ。この二人のうちのどちらかが行動していればこの悲惨な事件は起こらなかつただろうね」

「そう」

ユーノ・スクライア、そして高町なのは。その二人の名前を心に刻む

「意外と冷静だね」

「……子供だって考えることだってある。それに頭の中じゃまだ恨んでるわ」

「そうか、では私達の行動目的は一致している。私の計画ではもしかしたら彼女が邪魔になる可能性がある、その時に彼女を足止めして欲しい。別にどうしよう構わないのだが、殺しはしないでくれると助かる」

「善処します」

「そうか、では君にはこれから復讐のために特訓を受けてもらうことになるが良いかな？それはとてもきついものになると思われるのだが」

「構いません、それで成し遂げられるのであれば」

「そうか」

そうして養父との会話は終わった、別にこの人との関係と言うのは目的が達せられるまでの間の一時的なものに過ぎない。ならばこうして話していると言うのも無駄な事なのだろう

そして車はあまり人気の無い場所で止まった

「では行くごうか。ようこそ、魔法の世界へ。安心したまえ、君には才能がある」

こうして僕は、日常からだけでなく生まれ育った世界からも去っていく事となった

それからの日々は優しいものでは無かった

それなりの厳しさと言うものは想像していたのだがそんな想像など平和の中でぬくぬくと育ってきたような僕が想像したものであって本当の戦いと言うものをまざまざと見せ付けられた気がした

接近戦では骨の形が変わるほどボコボコにされ、魔法では魔力が切れて倒れるまで続けられる

そこで求められる事は最後まで諦めない精神と針の穴を通すようなコントロールであった

諦めたとたんに殴られ蹴られ、降参などもつてのほか、捕まるくらいなら両手を挙げる体力を使って敵を倒せと言われ。少しでもコントロールを失えばすぐ近くで爆発が起こる

名前は教えてもらったけど覚える気は無い、どうせこれが終わったらこの関係も終わりなのだ。だから僕は彼女達を教官としか呼ばない、猫耳をつけた二人の少女などどうでもいいのだ

彼女達は地球で仕事があるようなので僕につけるのはいつでもど

ちらか一人、養父グレアムの使い魔という存在である彼女達は養父の目的に力を貸しているのだそうだ

この頃動きがあったようで二人の動きが慌しい、何でも時空世界の警察と言う時空管理局が地球に現れたのだそうだ。そしてそこで現地の魔導士と手を組んだのだそうだ

そこで思い浮かぶのは二人の名前、高町なのはとユーノ・スクラエアである

どうにかしてその現地の魔導士と戦えないかと考えてみるが、教官から言われたのは「今の貴方じゃ無理」という事だった

それならばしかたがないと考え僕はとにかく今は特訓するしかないと考え、追いつくためにさらに訓練をしていくのだった

そこで一つ情報が入った

なんでも時空管理局の人物がこちらに訪問しに来るのだとか、それを影から見詰める

少年が一人に少女が一人、どちらも美形だ

しかし対談はすぐに終る、もし戦う事になったら十分苦戦する事になるだろうことは観察と教官から言われたことで理解した

だが勝たなくてはならない

目的のためには、どんな障害も乗り越えなくてはならないのだから

12月25日

僕は今海鳴市上空に浮かんでいた

養父からの連絡が入らないように携帯端末の電源は切っており

養父の計画では今日この日、化け物が開放されてしまつらしい。

どうでも良いが高町なのはとその仲間はそれを倒すために体力を使い果たすだろうということだ

悲しい事にまだ僕には力が足りない

彼女を倒すためには全然力が足りないのだ

魔法の実力でもそうだが、向こうには仲間が何人もいる。そんな場所にたった一人で挑みにいくなど愚の骨頂

教官は捕まってしまったようだ、だがそんな事はどうでも良い

高町なのはとその仲間は一人の敵を相手に戦っている

その戦いの中で使われている魔力の膨大さに驚きながらも自分のところを静めていく、タイミングを計る

チャンスはいつでも一回しか存在しない、もしかしたら一回も存在しないかもしれない

海になんとかでつかいのが現れた

なんだか気持ち悪いやつだがそんな事はどうでも良い、ただただ機を窺う

どうでも良いがあそこにいる人物達の使う魔法は全てがばかげた量の魔力だ、見ているだけでこちらの戦意を刈り取っていく

しかしそんな馬鹿みたいに魔法を使ってしまうえばいつかは尽きてしまうのは当たり前だ、絶対にこの戦闘が終わったとき、彼女達は満身創痍だろう

魔力が消えていくのを感じてみるともうでかい化け物はいなくなっていた、その代わり喜びに湧く少年少女の姿が見えた

見てるのが嫌だった

なぜアイツは笑っているのだろうか？

なぜアイツはのうのうと生きているのだろうか？

実際には僕は震えていた、アレだけの戦闘センスと魔力を見せ付けられたのだ、震えないわけが無い

でも今は違う、逆に今すぐに飛んでいきたくてしょうがない

僕は杖を前に差し出した

何の変哲も無いデバイス、そのデバイスはチカチカと点滅してこちらの指示を待っている

「シュバイツ、行くよ」

” Yes , my master ”

僕は何度も練習していた

練習していた魔法は、全てあの子の技。そのまま全てを彼女に返すために

「デイバインバスター起動、目標”高町なのは”」

” Divine Buster ”

杖の先に魔力が集まっていく、あちらはこちらにまだ気が付いていない

そうやっている間にもこちらの魔力は段々とたまっていく

「ディバイン」

たまりきったとき高町なのははこちらを見た、でもそんな事は関係ない

驚愕に見開かれる目、でもそんなモノはどうでも良い

全ては、何もかもが遅すぎたのだ

「バスター！」

前略

これが読まれている頃にはもう全てが終わった後だと思う。

そして全てが終わったという事は貴方との縁も切れたということだ
グレアムさん

だからもう貴方と僕とは関係は無い、だから僕はあなたのことは知らないし貴方も私のことは知らない

つまりはそういう事

それでは失礼

” 僕 ”

(後書き)

ちよつと前に予告を出したのにそのまま放置していた作品。今ではその予告すらも消してしまいました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5112o/>

リリカルってなに？

2010年10月25日21時18分発行